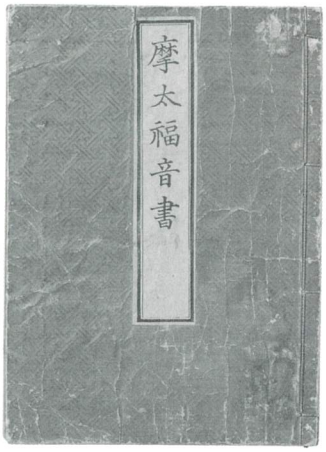
宣教師の働き



ゴーブル



日本最初の聖書

日本における300年の鎖国は、1854年（安政元年）ペリーの要請によってなされた「日米和親条約」の締結によって終わりを迎えた。すでに、1549年（天文18）にカトリック教会は日本において、伝道活動を展開させていたが、プロテスタント教会は未だに伝道の種が蒔かれてはいなかった。プロテスタント諸教派（アメリカ監督教会、アメリカ改革派、アメリカ長老派等）の伝道が開始されたのは1859年（安政６）のことだった。しかし開国後も「切支丹邪宗門の儀は固く禁制たるべき事」の禁教の高札のため、宣教師たちは英学塾を開き、英語を教える学校の教師となり伝道の準備をしていた。また、宣教師たちは日本語を学ぶと共に聖書の翻訳事業に着手した。1871年には、ゴーブル（Jonathan Goble）によって、国内で最初の翻訳聖書である『摩太（マタイ）福音書』がキリスト教禁制の中にあって刊行された。1873年（明治6）キリスト教禁止の高札が撤去されるまでに、ヘボン（J.C.Hepburn）、ブラウン（S.R.Brown）訳の『新約聖書馬可（マルコ）伝』、『同約翰（ヨハネ）伝』、『同馬太（マタイ）伝』も刊行された。

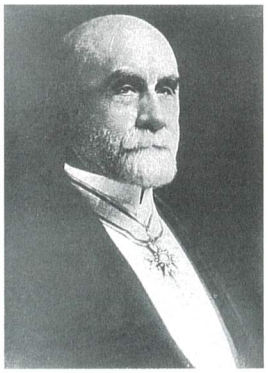
明治政府は1873年２月に「従来高札面の儀は一般熟知の事に向付き後取除き可申事」との通達を出し、高札の撤去を命じたが一般には何の布告もしなかったため、国民の多くは、禁制は継続しているものと考えていたのに対し、キリスト教徒はこれを禁制の解除と理解した。こうして、二百数十年にわたって掲げられてきた切支丹禁制の高札が撤去され、キリスト教の伝道や教会の活動が一応自由になされるようになった。自由になると共に、各派が続々と宣教師を送り込むようになった。これより一年前の1872年（明治５）３月10日、宣教師バラによって横浜に日本最初のプロテスタント教会である日本基督公会が設立された。ついで、築地に「東京公会」、神戸にはグリーン（D.C.Green）やギューリック（O.H.Gullick）などによって、1874年（明治７）摂津第一公会、大阪に摂津第二公会、1875年（明治８）三田に摂津第三公会が都市を中心に設立されていった。

キリスト教の禁制は明治維新後もすぐには解けず、岡山の街頭にも、地方の村々にも太政官の制札が見られ、キリスト教への弾圧も起こっていた。しかし、1873年（明治６）になってキリスト教が解禁されることとなり、岡山にもキリスト教の萌芽が見られるようになった。はじめて岡山地方の記事が出てくるのは1877年（明治10）９月の『七一雑報』の記事である。

「福山並びに岡山の報――先頃より福山並びに岡山の両所

において道を伝えられ主の御名を賛美いたし、教兄等の話しに各地いづれも都合よく、或いは10人道に志すものありて、其の中には確かに種を宿せし者もありと思う。且つ又岡山にては某氏なる名望ある人が該地の少年輩を扶けて京都の同志社英学校に入校させんとするの社を組みてすでに3、4名該社より入校するものが極りよし」。

この報告でわかる通り、1877年（明治10）には岡山にはキリスト教の種が蒔かれ、それに賛同する小さな群れが存在していたのである。その先鞭となったのは、1875年（明治8）4月、宣教医テイラー（W.Taylor）の岡山訪問であった。旧藩士であり、当時県の学務兼衛生主任の地位にあった中川横太郎が彼を招き、テイラーは、約一週間岡山に滞在して医療に当ったが、その折に、中川氏宅においてキリスト数の話をする機会を持った。これこそ、キリスト教の岡山への伝来の初めである。岡山県はテイラーを歓迎し、1875年（明治8）9月から岡山県病院に勤務したが、まもなく京都に移住した。おそらく新島襄の同志社設立に協力するためだったと思われる。1876年（明治9）12月にも同志社の学生であった金森通倫を伴い来岡。中川横太郎の斡旋で、漢学塾で伝道集会を開いている。テイラーは1879年(明治12)大阪に転居。1912年（明治45）4月アメリカへ帰国するまで医療救護事業とキリスト教の伝道に献身的努力を払い、多くの日本人に感化を与えた。


ベリー博士

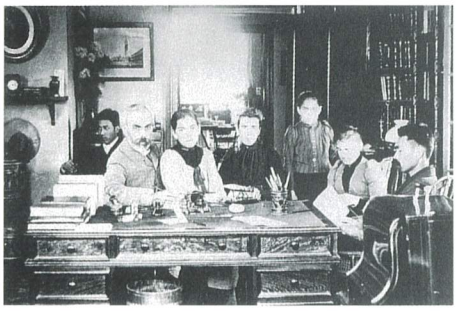

ペティー宣教師夫妻

宣教師の一人アッキンソン（J.L.Atkinson）は、アイオワ州で4年間牧師をしたのち、1873年（明治6）9月28日に来日した。彼は同志社の学生、横山円造、山崎弘道の二氏を伴って、中国、四国への伝道を目的として1877（明治10）に来岡し、一年の間度々岡山を訪問した。1866年にシカゴ神学校に入ったが、同級生にグリーン（D.C.Green）や、デービス（J.D.Davis）がいた。

1877年（明治10）7月、同志社の神学生金森通倫は中川の招きで来岡し、夏期休暇中に説教し、伝道を行っている。11月、中川は、当時神戸で日本語を習熟した青年宣教師を率いて伝道事業を行おうとしていたアッキンソンと共に、ベリー（J.C.Berry）を神戸に訪ねて、岡山に来て伝道するよう要請した。ベリー一行は中川のこの要請に対して大いに喜び、「岡山ミッション・ステーション」を設立することを決心した。

1878年（明治11）4月にベリー、ケリー、ペティー、ウィルソンの4氏が新設の「岡山ミッション・ステーション」に着任する。時の高崎五六県令は、彼らを歓迎、かつ優遇し、西田町にある氏の邸宅を提供して彼らを居住させたばかりで

なく、更に東山公園地内に西洋館三棟の建設を許可している。アメリカンボードから派遣された宣教師、医師のベリーは、宣教師ケリー、ペティー、看護師ウィルソンと共に、厚遇を受けながら、宗教、医療、衛生の各方面で目覚ましい活動を行った。県令の彼らに対する厚意と態度、中川の斡旋と尽力とは岡山伝道に大きな影響を及ぼした。又、ベリーは当時の岡山県立病院長として招聘され、ウィルソンは同病院の看護師として迎えられ、ケリー、ペティーは旧藩主池田家の設立による源泉学会の教師としても迎えられた。



ケリー宣教師一家

また、教育方面にも手を拡げることを企画し、西田町に「安息日学校」を開設した。児童より壮年、老年に至るまで別々に学級を編成して教育を行った。これは後の「岡山教会日曜学校」の前身である。

1879年（明治12）6月、金森通倫は同志社を卒業して岡山伝道に専念することを決心し来岡した。中川横太郎、ベリー、ケリー、ペティーもこれを助けた。中川家を拠点として一年間、岡山市及び岡山県下の猛伝道を開始。日曜日昼は中川家で説教、夜は市内三カ所で説教を行い、週末は県下伝道（総社、川辺、高梁、天城、下津井、西大寺、笠岡、津山等）を行った。

金森は縁故を求めて個人伝道にも努め、高崎県令を訪ね「岡山県民の生命を預かっている貴方の為に祈ってあげましょう」と大声で祈ったという。中川、高崎はキリスト教の信者とはならなかったが、キリスト教の理解と文化的施策にアメリカの宣教師の社会活動を通して、医学、教育、文化への貢献があったことを忘れてはならない。かくして、キリスト教を信じる者たちが増し加えられ、信仰を告白して信徒となる決心をした者が20余名に及んでいった。そして1880年（明治13）、いよいよ岡山基督教会が誕生していくのである。

新島襄と同志社

1864年（元治1）、新島襄は21歳で安中藩を脱して函館に向かい、アメリカ船籍のベルリン号に乗り、途中、上海入港後ワイルド・ローバー号に乗り換え、船長付きのボーイとして雇われながら約一年でアメリカに到着した。その後、アーモスト大学で学び、アンドーヴァー神学校に入学、ここでキリスト教の神学を学び、受洗。1874年（明治7）7月に同校を卒業した。そして、9月にボストン市内にあるマウント・ヴァーノン教会で按手礼を受け牧師となった。新島は、アメリカ合衆国の文明が盛んになった原因は、教育によることが多大であるのを見て、帰国後「日本にキリスト教の学校を



新島 襄

作りたい」との誓いを立てた。たまたま、1872年3月8日、アメリカの首都ワシントンに滞在していた岩倉具視遣外使節団の招きで、新島は田中不二麿文部理事と会見した。彼は欧米の教育について調査にあたっていたので、新島はこれに随伴し、教育施設と制度の調査を担当した。キリスト教こそ、文明の生命であり、教育は治安の母であることを悟って帰国、大学を設立したいという志をいっそう強くした。

同志社は、1875年（明治8）11月29日、彼が借り受けた京都市寺町通り丸太町上る松陰町旧高松邸の仮校舎に「官許同志社英学校」の看板を掲げ、協力者デービスと共に開校の祈祷を持って始まった。新島が開校した「同志社」とは「志を同じくする者たちの結社」という意味であるが、この名は、新島の妻八重の兄山本覚馬が発案した。しかし、当時京都において、公然とキリスト教主義の学校を開くことは、困難なことで人を近づけることよりも遠ざけることになった。



熊本バンドメンバー

翌年1876年（明治9）9月に山本覚馬の所有地であった烏丸今出川の旧薩摩藩邸跡地に校舎が完成し、同志社英学校は、寺町丸太町の仮校舎から移転した。間もなく、熊本から約40名の青年たちが同志社入学すると風紀も一新され、にわかに活気づくようになった。のちに彼らは「熊本バンド」と呼ばれるようになった。「熊本バンド」は、「札幌バンド」、「横浜バンド」と並んで、日本のプロテスタントの三大源流の一つとなった。同志社は彼らのために「余科」という学科を新設したが、実質的には「神学科」といってよい学科だった。こうして、教職者養成としての同志社の基礎が固まっていった。1879年（明治12)6月に同志社は第一回の卒業式を行い、英学校の余科15名の卒業生を宣教へと送りだしたのである。その中には、後の岡山教会の初代牧師となる金森通倫もいた。

初代牧師金森通倫

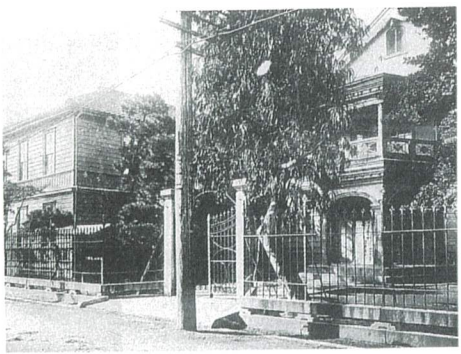
岡山県におけるキリスト教の開拓者である金森通倫は1857年（安政4）8月15日に熊本県玉名郡小田郷小天村に生まれた。金森繁蔵の二男で、通倫の祖父太郎左衛門は土地の総庄屋役をつとめていた。通倫は郷塾を経て熊本洋学校に学び、1876年（明治9）同志社に入学した。丁度明治維新直後の大転換期であり、岡山県においても欧米の新知識に傾倒して、これを吸収しようという意欲に燃えて、またキリストの福音が新しく伝道されようとしていた時であった。当時の岡山の先覚者中川横太郎、西毅一らの斡旋奔走により、同志社神学生であった通倫は再三にわたって岡山に招かれ、熱心に伝道に従事した。

かくて岡山における伝道の門戸も開かれたので、1879年（明治12）同志社卒業と同時に通倫は、岡山の教勢拡大を期して来県し、岡山市に本拠を置いて県下各地に伝道を行った。特に施療の傍ら伝道していたベリー博士と協力して大いに伝道に努め、総社、川辺、倉敷、下津井、天城、西大寺、笠岡、津山と東奔西走し、受洗者も次第に増加するようになった。もちろん黎明期のことであり、伝道に際して、群衆が殺到して罵言のうちに砂石を飛ばすようなこともしばしばであった。



金森通倫

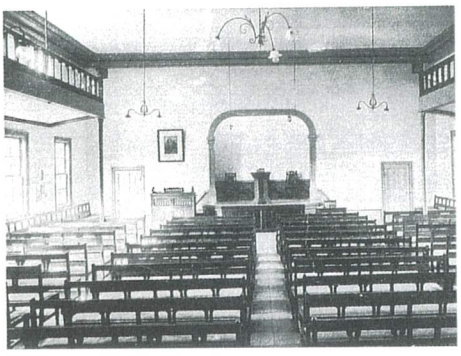
1880年（明治13）10月13日岡山基督教会（岡山市西田町の知事高崎五六邸、現在岡山市北区中山下）が設立されると初代牧師に就任した。当地における最初の洗礼式が新島襄の司式によって行われ、27名が受洗、6名の転入者と合わせて33名を持って岡山教会の宣教が展開されていくこととなった。教会への勧告をアッキンソン氏が述べ、新島は金森への按手礼と勧告をなし、横井時雄が諸教会を代表して歓迎の握手をなし、沢山保羅が初代牧師金森通倫の按手の祈りをささげ金森の祝辞をもって閉会した。



最初の教会

金森の岡山におけるキリスト教の開拓伝道は目覚ましいものがあった。また、彼のキリスト教伝道活動を通じて、当時封建社会から抜け出して間もない時代に文明開化の光がもたらされ、世界への開眼、社会に対する近代的感覚の高揚など彼の与えた影響は見過ごすことはできない。

金森は1886年（明治19）6月から同志社英学校の教員となり、新約学などを教えた。1888年（明治21）9月には社長代理として新島を助け、1889年（明治22）6月には同志社神学校、普通学校、予備校三校の校長を兼任した。彼は新島の後継者と召されていたが、1890年（明治23）新島の死去と共に同志社を去り、東京に移り番町教会の牧師となった。彼の信仰は振り幅が大きく、自由主義神学を提唱したために一時キリスト教界から去ることになった。また、実業界や官界に転出したが、妻の死を契機に再びキリスト教界に戻り、救世軍、ホーリネス教会などで活躍した。彼は1932年（昭和7）に隠退し、余生を読書、著述、あるいは魚釣りに過ごし1945年（昭和20）3月4日福島県郡山市の三男五郎氏宅にて永眠した。



大正時代の会堂